

「悲しみの深まるどころに」

ヨハネによる福音書 二十一章十五〜十九節

今月は前回に続いて、ヨハネの福音書の締め括りの部分から 聖書の語りかけを聴いていきたいと思えます。ヨハネ福音書の編集者（ら）が最終的に付加したと考えられる、いわゆる「補遺」的な二十一章の箇所です。しかも、前回も申し上げたとおり、逆引き的に節を戻すようにして、（前回の直前の）十五〜十九節を御一緒に読み進めたいと思えます。すでにお分かりのとおり、イエス・キリストの弟子の「ペトロ」をめぐる出来事その内容となっています。弟子たちのリーダー格のペトロです。そこに記された二つの事柄から、しかもそれらを逆引き的に見ることによって、私たちはそれぞれに何を聴き取るでしょうか。

日本基督教団の牧師だった、宮島新也とおっしゃる先生のお話を目にしました。もう五十年ほども前のことだそうですが、次のようなお話です。お兄さんがブラジルのあのアマゾンに移民をされ、そこで農業を始められたといえます。現地の森を切り拓いて小さな農園を造り、細々ながらも農業を始められたのだそうです。ところが、入植をされて数年が経ったころ、隣りの御一家との間にトラブルが起こり始めます。隣りといっても、ブラジルのアマゾンですから、広々とした土地のずっと向こうに暮らしている「隣りの御一家」ですが……。その御一家は牧場をかなり大がかりにやっておられたようです。けれども、その牧場の牛たちが時々 何十頭も移動してきて、お兄さんのささやかな農場の作物を踏み荒らすようになったというのです。おまけに、開拓で切り倒した木を焼き払うようなこともあり、その火が風の加減でお兄さんの農場の方にまで飛んできて、納屋などを焼いてしまったりもするわけです。苦勞をしながら、ちっぽけな農園をされていたお兄さんです。泣きつ面に蜂とでも言ったらいいでしょうか。そのたびに出かけていって、は、「弁償しろ」「いや、弁償などできるもんか」とやり合ったといえます。ですが、そんなあるとき、そのお兄さんがお隣りに出向いて、こうお詫びをされたのでした。「弁償しろなどと怒鳴り込んで、申しわけなかった。もういいんです。こうしていかがみ合うことのほうがどんなにきつくてつらいことか。どうか これまでの自分をゆるしてください。できたら また仲良くしていただけにお願いします」。そう謝られたというのですが、それは、自分の家の入り口に一枚の「額」がかかっていたからだといえます。そして、そこに一つの「書」が収められていた。「自分を愛するように、

あなたの隣り人を愛しなさい」という、イエス・キリストのあの有名な御言葉でした。以前、家を訪ねてくれた日本人の牧師から贈られたものでしたが、文句を言いに出かけるたびにその書が目に入って、どうにも居心地が悪かったというのです。ですので、思い切って謝ったというわけですが、ところがそうしてみると、それまで意地の悪かった相手方の牧場主ぼくじょうぬしの態度も急に変わった。「いやいや、こっちこそ悪かった。いつかきつと弁償させてもらいますので」と、そうまで言ってくれたのでした。こうして「メデタシメデタシ」となったわけで、当の宮島先生も感動して、礼拝の説教できつそくこの話を紹介させてもらったと述べておられました。けれども、です。その後あとでのことなのですが、「でも」と、宮島先生の言葉はそこで終わってはいませんでした。それでおしまいでなく、その言葉を次のように続けておられました。「でも、私は兄と違って少々ひねくれているもんですから、いろいろと考えてみたのです。つまり、もしも相手が違う態度をとったとしたら、兄はいたいどうしたろうか、ということですよ。兄の言葉を聞いたお隣りさんが例えば『そうかい。自分が悪いと認めてんだな。そりゃあ結構なことだ。もう二度と、イチヤモンなんかつけてくるなよ』などと、そんなふうにおうへい横柄な態度で答えたとしたら、兄はどうしただろうか。普通考えられるのは、相手にこちらの思惑おもわくと違った態度をとられると、また元に戻ってしまうということですよ。『こっちが頭を低くして謝りにきてやったのに、よく分かった。もうこうなったら、徹底的にやってやる』と啖呵たんかを切って帰ってくる。二度まではいいけれども、三回目ともなったら一転して、そのような攻撃に転じるというのが一般的なのではないでしょうか。そう言葉を加えておられました。そして、そのうえで、次のように言われるのでした。「しかし、相手がたとえどうあろうが、反発してやり返してこようがどうしてこようが、そのようなことには動かされない。それでもそれを受け止めて、受け入れる。もしもそういうことであつたとするなら、それはがぜん、イエスの赦ゆるしに似てくるように思うのです。イエス・キリストの赦しというのに似てくるように思われます」。宮島先生はそのように結んでおりましたが、「赦し」ということを考えさせられるお話ではないでしょうか。「本当の赦し」というのはどんなものなのか、ということですよ。相手が自分の思うような態度で返してこなければ、すなわち自分の意に沿うようなかたちで応えてくれなければ、心がそこで冷めてしまう。冷めるだけではなく、時には相手を無視したり、相手に仕返しさえしたりしてしまうのが私たちの現実のように思われます。相手の何がどうあれ、それを本当に受け止め、そして深く深刻なところでその人を立たせて、生かしてゆく。そのようなことというのはやはり、イエス・

キリストだけにしかできないのではないか。イエス様にして初めてできることなのではないかと、そう思われています。

四つの福音書に書き留められているイエス・キリストは、そのどれもが相手を受け止めて赦すお方のように思われます。徴税人のあのザアカイにそのようにされ、あの罪の女にそのようにされ、放蕩息子ほうとうむすこのあの弟にもそのようにされたお方でした。そして最後には、御自分を十字架につけたあの人たちのためにさえ、赦しを祈られた。イエス・キリストはそのようにして受け止め、赦し、そしてそうすることでその人たちをもう一度生きられるようにしてくださったのではないのでしょうか。今回の主役は弟子のペトロですが、このペトロこそ、まさにその代表ではなかったかと思われます。ペトロはかつて、イエス様に尋ねました。「隣りの人を、私たちは何回赦したらいいのでしょうか」(マタイ十八・二十一)。そのとき、ペトロに返ってきたのはどんな言葉だったのでしょうか。「七の七十倍までも赦しなさい」(同二十二)。つまり、「どこまでも赦しなさい。その人がもう一度生き返るまで、何度でも赦しなさい」と、イエス様はそう言われたのでした。それは実のところ、それを口にされたそのイエス・キリスト御自身にしか、真実の意味ではできないことだろうと思えます。けれども、かつてそのように言われたペトロはその言葉を、心のどこかに抱えていたのではないのでしょうか。軽い言葉ではありません。重くて、本当はとんでもなく衝撃的な言葉でもあります。忘れようはずがないと思えます。そして、今月のやり取りのこのとき、ペトロはきつと、その言葉を想い出したにちがいない。私はそう思っています。自分が今まさにイエス様によつてそのように赦され、そして生き返らされていくのですから、その心によみがえ甦らないはずがないと思えます。そして、そのようにしてもらって初めて、ペトロはやつと救われた。真実、深く救われたのではないのでしょうか。そうでなかったら、ペトロは「背信」という傷を負ったまま、いつまでも宙ぶらりんのままになってしまいます。そこには、傷の癒やしがありません。救いがありません。ヨハネの二十一章はペトロを群れの牧会者ぼつかいしやとして再起させ、その中心的人物であることを明らかにするために付加されたと、研究者のほとんどが指摘しています。たしかに、そのとおりかと思えます。しかし、であればこそまさにその前段として、ペトロの受け止めと赦しと復活とが備えられ、書き留められものではなにか。私はそう思われています。そして、そのようなペトロの出来事は、不信仰の爪痕つめあとが同じように残り、様々な傷が同じようにうず疼くこの私たちにとつてもまた、イエス・キリストの救いの大切なメッセージを伝えてくれるもののように思うのです。

今月の箇所は、(今、少し触れたように)弟子のペトロに対するイエス・キリストの「牧会命令」

と、よくそのように呼ばれるところです。御自分を信じる者たちの信仰に心を配り、その世話をして、福音を伝えながら「私の教会」をつくっていくようにと言われる、イエス・キリストのそのような招きです。書き出しの十五節を見ますと「食事が終わると」とありますので、すぐ前のティベリアス湖（ガリラヤ湖）の岸边での朝食の続きだということが分かります。ということは、そこにはほかの弟子たちもいた。みんながまだそこにそろっているその所で、その目の前でイエス様はペトロに尋ねられ、ペトロの答えを求められたことになります。そこで、イエス様がペトロに向かって「あなたはこのわたしを愛しているか」と三度、繰り返して尋ねられます（十五、十六、十七）。それに対し、ペトロはそのたびごとに答えます。「わたしがあなたを愛しているのはご存じのとおりです」（同）。すると、またそのたびごとに、御自分の教会の働きへと、イエス様がペトロをお招きになる。「わたしの羊を飼いなさい」（同）。そうして後、最後には、ペトロがどのような死に方で殉教していくのか、そのことを告げたいので「そうであってもなお、このわたしに従ってきなさい」（十九）と、イエス・キリストはそれようにおっしゃられるわけです。これが今回の場面のあらましと言えるかと思えます。ならば、そのようなやり取りのなかから、私たちはいったい、何を聞き取ったらいいのか。信仰のどんなメッセージを受け取ったらいいのか。それがこの私たちへのイエス様からの求めと言えるでしょう。

私はそのことを、「三つの不思議」を手がかりにして探っていけたらと願っています。すなわち、今月の箇所には、不思議なことが三つあるということです。そして、そのどれにも、何かしら大事なメッセージが隠されているように思われます。

そのまず第一は、イエス・キリストの最初の質問の中にあります。イエス様は十五節で、ペトロにまずもって「尋ねられます」。「ヨハネの子シモンよ、この人たち以上にわたしを愛しているか」。イエス様はそう尋ねられるのですが、それにしても、これは聞き方によってはどこか棘のある言葉ではないでしょうか。「この人たち以上に」というのは、愛する心を比較しているようにも響きます。その意味で、躓きの種にもなりかねないように思われます。すでに見たとおり、これはほかの弟子たちもいた所で言われたわけですから、すぐそばにいた者たちはいったいどう思っただでしょうか。愛の比較だとしたら、そうとうひがんだのではないか。経験からして、そんなふうにも感じさせられます。私たちの内には、仏教的に言えば「人間の性」とでもなるのでしょうか。人と競って抜きん出たいという、そんな思いが捨てがたく潜んでいるように思われるからです。しかし、それにしても「愛の心を比べるようなことを、私たちの知っているそのイエス様がなんぞ言われたのだろうか」と、そのように不思議に思われませんか。ある方はこんなふう

言っておられます。「ペトロは弟子たちの中の弟子として、その後の教会の柱になつていく人物なんだから、ほかの弟子たちとは違う特別な愛を求めたとしても不思議はないのではないか。むしろ、当然とも言えるのではないだろうか」。けれども、私はそう言われてもやはり、いま一つシツクリきません。そして、むしろこういうことではないのかと、想像を膨らませていきます。紙幅の関係で細かなことは省きますが、つまり、十字架を目前にしたその最後の最後のときに（最後の晩餐の後、あとゲッセマネの園に向かう途中で）ペトロがイエス様にどんなことを言ったか、ということです。覚えておられるでしょうか。「たとえば、みんながあなたにつまりても、このわたしは決してつまりません」（マタイ二十六・三十三）と、当のイエス様の前で、そして仲間の弟子たちの前で大見得を切ったのでした。それだけではありません。別の所では、（これまたみんなの前で）同じような勢いで「あなたのためなら命を捨てます」（ヨハネ十三・三十七）と、イエス様にそのように言ってもいます。弟子たちの中でリーダー格だったペトロです。ひよつとすると、このような「ほかの誰よりも」という臭いのするそのような物言いを普段からしていたのかもしれませんが。ペトロ自身は気づいていなかったかもしれない。けれども、そうした言葉が実際、繰り返されています。しかも、それなのに、ペトロはイエス様を捨て、みずか自らの保身を図つたのでした。そんなペトロにとって、「この人たち以上に」という言葉はどのように響き、どんな意味合いを持っただろうかと、私は考えさせられます。ペトロは「はい、主よ」（十五）と言っています。が、「この人たち以上に」云々というその問いそのものには答えていません。おそらくは、何事かそれまで意識せずに行ったことに気づかされ、ハッとさせられて途惑つたのではないか。そして、返す言葉が見つからず、気づかされたその自分自身を飲み込んだのではないか。その顔には、そうした面持ちがにじんでいたのではないだろうか、そう想像させられています。ですから、ではないでしょうか。二度目・三度目の質問では、イエス・キリストはもはや「この人たち以上に」という言葉を加えておられません。さらには、前回の箇所（二十一・二十五）から逆引き的に見返すと、このことがいつそうよく見て取れるように思われます。イエス様は前回、ペトロに対して「それがあなたに何の関係があるか」（二十二）と言われました。すなわち、御自身への信仰において、人と比べる比較や競争、優劣といった意識がどれほど無意味なものか、ペトロに教えられたわけです。それはペトロにとって、いわば「止めの一撃」とでも言えるものだったのでないでしょうか。（気づかずして？）ペトロの内に潜んでいた比較や競争の思いが打ちのめされたからです。つまり、「この人たち以上に」という今回のその言葉はこの結びへと繋がる初めの一言であり、たんしょ端緒の一言ではなかったかということ。それはペトロにとって、必ずしも心地の良い言葉では

なかったらうと思います。むしろ、苦にがくもあり、きつくもあるものだったのではないのでしょうか。けれども、それは忘れてならないことを教えてくれるものであり、真実癒やされて生き返るためには必要不可欠なものだったにちがいありません。様々な囚とらわれから解き放たれ、イエス・キリストへの信頼とそこから来る自由に生きる者としていただけるからです。その意味で、「この人たちに上に」という言葉もまた、ペトロの目を恵みの奥深くへと向けさせてくれた導きの一言と言えるように思います。不自由な自分から解放され、イエス・キリストへの思いに真つすぐ生きる者とされていく、その幸いです。いろいろな方たちがいろいろな読み方をしておられる箇所です。皆さんはどうお考えになれるでしょうか。

続く二つ目もどこか、これと通するところがあるように思われます。これもかいつまんで申し上げれば、二つ目というのはこういうことです。イエス様はどうして「このわたしを信じているか」と聞かないで、「愛しているか」と聞かれたのだろうか、ということ。別の言い方をすれば、信仰の世界のことなんだから、信仰があるかどうかを尋ねるのが普通なのに、なぜ「愛する」ということを尋ねられたのかということ。この点についてはよく次のように言われ、私自身も同じように思われています。それは、イエス・キリストはたしかに、何よりもまず「信じること」を求められ、「信頼すること」を励ましてくださっている。けれども、それがどれだけ「愛する」という具体的で積極的な生き様にまでなっているかという点、それはなかなかおぼつかない。イエス様のおっしゃることは間違いないし、信頼できて、安心を与えてくれる。でも、それが気持ちの上でのこととどまってしまうと、そのイエス・キリストの御旨みむねに具体的に「生きる」というふうにはあまりなっていないのではないかと、ということ。信仰というのはやはり、心持ちのようなもので終わるのではなく、具体的に「実」を付けていくものだろうと思います。信仰とか信頼とかいうのは、日々の生き様に結実して初めて、生きていると言えるのではないのでしょうか。「コリントの信徒への手紙一」のあの有名な「愛の御言葉」も、そのことを示唆しているように思われます。ここでは「信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である」(一コリント十三・十三)と述べられています。それは言うまでもなく、信仰がより価値の低いものだと言っているわけではないでしょう。そうではなく、信仰とについては「愛」という生き様にまで高められ、そのようにして具体的に結実していくものなのだと、そう教えている一節のように思われます。そして、ペトロはまさにそのところで、イエス・キリストを置き去りにして逃げてしまったわけです。イエス様を具体的に愛し、そのために具体的に行動せねばならなかったそのところで、我が身の安全を守るためにそれをしなかったのです。「愛しているか」とイエス様に問われ

て、ペトロはきつと、この時のことを想い起こしたのではないでしょうか。この時の傷が疼いてくるのを感じたのではないか。そのように思えてなりません。

そして、最後の三つ目となりますが、それはこの私にとってとりわけ深い意味合いをもって迫ってくるものもあります。どんな不思議かといえば、イエス・キリストとペトロの間答におけるある言葉の変化の不思議であり、深い意味合いとは、そのやり取りの末にペトロが「悲しくなった」(十七)と記されているその悲しみの意味するところです。多少「面倒といえばそう言えなくもありませんので、順を追って、少し丁寧に見てゆくことにしましょう。(以下の点については、BFC「聖書読解余滴」に掲載の「優しさの奥行き(二)」で詳細を扱っています。ぜひ、あわせて御覧ください。)

ある言葉の変化というのは、こういうことです。つまり、「わたしを愛しているか」とペトロに尋ねられたイエス・キリストのその「愛する」という言葉が、原語のギリシア語では実は、一度目・二度目と三度目とで違っている。それはいったいなぜなんだろう、ということなのです。具体的に言いますと、一度目と二度目は、^{アガバース}“ἀγαπᾶς”という語が用いられています。^{アガバース}“ἀγαπᾶς”という動詞の変化形です。ところが、最後の三度目になると、これが別の^{ファイレイス}“φιλεῖς”という言葉に変わっています。^{ファイレオー}“φιλεῖω”という動詞の変化形です。ちなみに、一方のペトロのほうは三回とも^{ファイラー}“φιλεῖω”という同じ言葉で答えています。これも^{ファイレオー}“φιλεῖω”という動詞の変化形です。そして、これら二つの言葉についてしばしばなされるのが、次のような説明です。(一般論として)^{アガバース}“ἀγαπᾶς”がいわば「神的な、高次の愛」を意味するのに対し、^{ファイレオー}“φιλεῖω”は「人間的な、それより幾分低い愛」を表わす。であれば・・・となるわけです。であれば、イエス・キリストは何らかの意図をもって、三度目にその問いの言葉を変えられたのではないか。それはいったい、いかなる意図だったのだろうか。そんな疑問が生じてくるわけです。実際、こうした変化の不思議をめぐって、聖書学者の間で少なからぬ議論が交わされてきました。例えば、古くからのものとして、イエスがより高い信仰的献身を求めたのに対し、ペトロはそのレベルの備えができていなかった。そこで、イエスはペトロに合わせるようにして、最後に、ともかくにもより人間的なレベルの愛情を確認しようとした。ペトロが悲しくなったのは、自分がその程度の愛の持ち主と見られたことにあると、そのように解釈する立場があります。あるいはまた、ペトロの応答の背後に、洗足の際に語られたイエス・キリストの言葉(ヨハネ十五・十二〜十五)を想定する人もいます。「友のために自分の命を捨てること、これ以上に大きな愛はない」という、あの言葉です。そして、ペトロは三度とも「あなたを友として愛する」という言葉を用いて答えているが、ペトロはそこですでに、イエスに対する(命を捨て

る)友としての愛を告白している。そのペトロの言葉に思いを合わせるようにして、イエスは最後に「あなたはわたしを友として愛するか」と問われたのだろうと、そう理解するのです。ですが、研究者の大方は、二つの語が混在して使われている、そこにさほどの意味はないとみているようです。なぜかと言えば、ヨハネの福音書はその特色として、類似の語を同様の意味で多用する傾向があること。また、イエスはそもそもアラム語で問われたはずで、そのアラム語は基本的に一つの動詞で多様な愛を表現すること。さらには、一方のペトロを見るかぎり、問いと答への言葉の違いを意識している様子がないこと等々、その根拠を述べています。ちなみに、二つの語にそれぞれ別の訳語を当てはするもの、そこにさしたる意味の違いがあるとは考えない学者もいて、これもまたこうした人たちの一員と言えます。

これがイエス・キリストの言葉の変化をめぐる不思議理解の現状ですが、研究者らはそのうえで、そこでの出来事に盛られたメッセージをそれぞれに読み取るうとしています。それらは例えば、罪の自覚と悔い改め、その赦しとそこから再起、役割の回復と牧会・宣教への派遣命令、心の深みの理解とその受容・・・と述べられています。がしかし、その一方で、ここでの要点はむしろ、そうしたことより教会の最高指導権がペトロに付与されたことにこそあると言う学者もいます。そんなぐあいでも、(時に大きく、時に微妙に異なる)理解の違いに少々途惑いを憶えさせられもします。それにしても、いろんな読み方があるとお思いになられないでしょうか。その意味では、いま一つスッキリしないものが残るかもしれません。けれども、そうしたなかにあってもなお、ある一つの点についてはどの立場の人々もほぼ一致しているのです。それは何かと言えば、ペトロが深い悲しみに沈んだということです。十七節の中ほどにこうあります。「ペ・ト・ロは、イエスが三度目も、『わたしを愛しているか』と言われたので、悲しくなった」。ここで「悲しくなった」と訳されている語は、原語のギリシア語では ^{エリクム・エー} "ἐλυπήθη" という言葉で、^{リクム・エー} "λύπη" の変形形で用いられています。が、特段の含意を有する語ではありません。受動形で「悲しむ」「苦悩する」を意味します。つまり、ペトロはこのとき、文字どおり悲しみ、苦悩したのでした。おそらくは、イエス様を三度にわたって否認した、内に疼いてやまない自らのあの背信の光景が脳裏に甦ったのではないのでしょうか。イエス・キリストによる三度の問いと、それらに対するペトロの三度の応答。その推移の全体を文脈の流れに沿って読み進めるとき、ペトロの心持ちの変化がはっきりと見えてきはしないのでしょうか。ペトロの心情はどう見ても、(一度目、二度目と)しだいにきつくなって、そして最後に(三度目に)それが解かれて解放されるというふうには描かれていません。二度の問いかけにきつくなったペトロの心情を察し、三度目はそのきつきさを和らげるようにして、ペトロが口にしたのと同じ言葉でイエス

様が語りかけられたと読むことはできません。事はむしろ逆で、(一度目、二度目と)どこかあつさりと答えていたそのペトロが、最後に(三度目に)愕然がくぜんとしている。それが今回の箇所に見るペトロの姿ではないでしょうか。だとしたら、その愕然の中身はいったい何なのか。その悲しみの中身ははたして何なのかということ。これが今回の焦点にほかなりません。

実際、この点についても、研究者のほとんどがほぼ共通した理解を示しています。そして、それは実得的を得ていて、今回の出来事に込められたヨハネのメッセージの深みを突いているように思われます。それらを要約して記すなら、次のようになります(前記の「優しさの奥行き(二)」に詳述)。

すなわち、イエス・キリストに繰り返し問われることで、ペトロは自身のあり様ようをその奥底まで探る者とされた。そして、自らの言葉が実体のあるものか否か、深く思い知らされたのでした。なぜならば、十字架以前のかつての自信は今や、ペトロからすっかり消え去っていたからです。こうした理解は日本基督教団の隠退牧師、加藤かとう(常昭つねあき)先生の言葉にとりわけ美しく表現されています。つまり、「ペトロの『わたしはあなたを愛している』という表現は、喜びに溢あふれて、悲しみも何もかも消えてしまったところところでなされている愛の告白ではありません。悲しみが、ますます深く深くなるなるところところでなされたものです」と、加藤先生はそう言っておられます(すでにお気づきのとおり、今月のタイトルはここからお借りしたものです)。要するに、イエス様とペトロのやり取りは軽いものでないということです。そこには確かに、ペトロの深い苦悩がありました。

そして、です。そして、深い悲しみと苦悩のそのところに同時にまた、イエス・キリストの顧みと伴いがあったということ。それがふたりのやり取りから見えてくるもう一段深い真実であり、この箇所における中心的使信ししんの一つと言えるように思います。言葉を換えるなら、悲しみがそのように深く浸透したそのところで、だからこそ真実 身にしみて知らされるイエス・キリストの深い優しさです。恵みの大きさ、深さを物語るものと言えるでしょう。イエス様の期待を何度となく裏切り、自分のダメさを繰り返し思い知らされたペトロでした。ですから、ペトロはそんな自分の本質に愕然とさせられ、悲しみのうちに心を悩ませたのでした。けれども、ペトロは同時に、(時に独り熱くなったり舞い上がったたりして、軽薄にそうすることもあったとはいえ、しかし)決してイエス様を愛していなかったわけではない。偽りの思いから事を言ったりしたりしたわけではありませんでした。だとしたら、そこにいたのは自らの頼りなきにくずおれ、「でも、自分は自分なりに精いっぱいやったんです」と、思うようにならない現実もんじに悶々とするペトロではなかったでしょうか。私たちの日常となんとよく似ていることでしょうか。「主よ、あなたは何もかもご存じです」(十七)とイエス様に訴えかける言葉のうちに、そんなペトロの姿が見ては取れないでしょうか。イエ

ス・キリストは今、このペトロのところに行くべきです。ダメさを味わい尽くしてくずおれている、そのペトロのところに。真実 信頼しうるものは自分の中にはないことを思い知らされた、そのペトロのところに。そこまで（いわば）落ちてしまったそんな自分のところに この方はなお一緒にいてくださっていると知ったなら、はたしてどうでしょうか。ペトロはこの深みから、イエス・キリストへの信頼をいま一度 新たにされたのではないのでしょうか。至らなさも含め、すべてを御存じでいて、しかも 自分の思いを深いところで受け止めてくださっている。このお方のその愛の真実をおいて、信頼に足るものが他のどこにあらうか。ペトロはきつと、そのように感じ取ったのだらうと思います。悲しみの深いそのところから、優しさの深みを知る者とされる。そこにあるのはまさに 優しさの奥行きであり、恵みのそれではないでしょうか。

このやり取りに続けて、ヨハネは二つのことを連続して記しています。第一に、イエス・キリストがペトロの殉教を予告し、そのうえで「わたしに従いなさい」（十八〜十九）と告げられたこと。次に、（前回 取り上げた）「あなたに何の関係があるか」（二十一・二十二）との、ペトロに対するイエス様の言葉です。そして、そこでもまた、「あなたは、わたしに従いなさい」（同）と、同じ指示が繰り返されています。つまりは、人との比較や競争といった自意識の囚われから解き放たれ、イエス・キリストを真つすぐに見詰めて、その御旨に従うこと。そのことが最終的に説かれ、それに先立って、殉教をも覚悟のうえで 群れの牧会に献身するようにと、具体的な指示が告げられているということです。これらはどちらも厳しいもので、うわついた軽々な気持ちからできることではないの言うまでもありません。だとしたら、そこへと向かう前段であるその直前の今回のやり取りが底の浅い癒やしを与えるような、そのような浅薄で安易なものとはどう考えてもありません。自らのどうしようもなきに底深くくずおれつつも、そこになおも伴ってくださっているイエス・キリストを発見する。ちぐはぐで矛盾だらけの自分ながら、それでも確かに御自身への思いのあることを認めてくださっているそのイエス様を知る。そして、そのイエス・キリストからなんと、御自身の教会の働きを担うようにと押し出される。これこそ本当の癒やしであり、真実の回復と言えるのではないのでしょうか。このように、今月の箇所は逆引き的に見返すとき、そこに置かれたメッセージがさらにもさやかに見えてくるように思われます。

実のところ、今回の箇所はペトロの生涯において、（考えようによっては最大の）重要な転換点になったところと言えるかもしれません。それまでの自信や優越感、リーダー意識・・・といったあれこれが見事に崩れ去り、悲しみに深く打ち沈んだからです。そして、そこから、恵みによって引き起こされたからです。ペトロはこの深さの優しさによって初めて、それまでと違う人となりに変えられ、

それまでと異質の強さを与えられたのではないのでしょうか。ペトロはそのようにして、真実、その後の教会のリーダーとされていったように思われます。

であるなら、そこでこの私たちに示されるのはいったい、どんな事柄なのでしょう。どんなメッセージを、私たちはそこから聴き取るように期待されているのでしょうか。それは、一言で言うならイエス・キリストはペトロを捨て置くままにされなかったということ。それどころか、ペトロを再び生き返らせ、御自身の務めへと押し出されたということではないかと思えます。この私たちについてもまた、イエス様はそのように、これを捨て置くようなことはされず、繰り返し生き返らせ、そして御心のあるところへと押し出してくださいさるように思います。私たちにもまた、一つや二つですまない幾つもの傷跡があるのではないのでしょうか。良くないことをしたという傷もあれば、人に痛みを与えた傷もある。なすべきことをしなかったという傷もあるかもしれません。そして、言うまでもなく、イエス・キリストに対する不信仰の傷跡もあるのではないのでしょうか。けれども、そのような傷の疼きを、イエス様は御存じでいてくださる。また、至らないながらも、嘘でない心がおそこにあることも知ってくださいている。そして、私たちをもう一度立たせ、それぞれが必要とされるそのところへと押し出してくださいさるように思うのです。そのような恵みの約束が聖書の向こう側から聞こえてくるように思われます。

ただし、こうした恵みへの感謝と同時に、一つだけ憶えておかねばならないことがあるように思えます。それは、イエス・キリストへの感謝と信頼が決して薄っぺらなものにならないように、ということ。イエス様の下さるいのちはバーゲンセールのようなものではないからです。底の浅い気休めを切り売りし、束の間の息抜きを提供するようなものではないからです。実際問題、ペトロの心はどんなだったかと思わずにはおれません。イエス様はたしかに、とんでもない目に遭わされました。でも、我が身可愛さに逃げ去ったペトロのほうも実は、大変な苦しみの中にあつたのではないか。不信仰と罪の傷に苛まれていたのではないのでしょうか。そのようななかから、ペトロは死になつて、イエス様に向き合つていったのだらうと思えます。ペトロは自分の至らなさを思い知らされました。ダメさというものを見せつけられたはず。ペトロはそこで、その深みからイエス・キリストの恵みを受け止めたのでした。その感謝とうれしさはどれほどのものだったか。吹いてもそう飛ばないような、そんなズッシリとしたものだったにちがいありません。私はこう思われています。いい加減なところでの癒やしは、本当の癒やしにはならない。それは本当の赦しにも、本当の救いにもならない。そう実感させられています。

このことを思うたびに、私の心にいつも浮かぶ証しの言葉があります。それは、前日も御紹介した清水恵三しみずけいぞうというすでに故人となられた牧師の言葉です。清水先生は日本基督教団の牧師として長野の信濃村伝道所と東京の三鷹教会で牧会されましたが、その間、『辺境通信』という定期誌を出される一方、教団の農村伝道神学校で教授と校長（代理）をも歴任されました。著名な石島三郎先生いしじまざぶろうを恩師とし、優れた説教者としても知られた方で、著書も複数出版されています。心に浮かぶというのは、そのような先生にしては思いがけなくも響く、深い告白の言葉だからです。御自身の思いの籠もったもので、イエス・キリストに仕えるということを考えるとき、忘れてならない大切な一点を繰り返し思い起こさせてくれる言葉だからです。それは、牧師になられて三年ほどが経った頃のことと書いておられました。そのとき、先生の身にいったい何が起こったのか。説教がどうしてもできなくなってしまうのだそうです。それで、講壇をほかの方に代わってもらって、別の教会の礼拝にこっそりと出席し、そこでの説教を聴かれたといいます。毎週説教をせねばならない牧師にとってはよく分かる、どこか身につまされる経験ではないでしょうか。ただし、間違つてならないのは、清水先生が行きつまったのは話のネタが尽きたとか、あるいは聴く者を飽かさないうまい展開の仕方ができないとか、そうしたいわゆるテクニクの次元での問題ではない。そうではなくて、そもそも単なる人間でしかないこの自分のような存在に神の言葉と言われるその聖書を語ることができるのか、説教をすることが許されるのかという、そうした深さでの問題だったということです。清水先生はそのような行きつまりを引きずりながら、ある教会の礼拝に出席されたのでした。教会は、教団の長野教会。説教者は、小原福治というその教会の牧師でした。公立小学校の校長をも歴任し、信州の教育に多大な足跡を残された牧師です。その礼拝に清水先生は出席され、心を注ぎ出すようにして、小原牧師の説教に聴き入りました。ところが、です。その時の聖書の箇所がなんと、「人には教えながら、なぜ自分には教えないのか」という「ローマの信徒への手紙」のあの厳しい箇所（ローマ二・二十一）だったというのです。そして、小原牧師がその所から、人を教えて自分を教えない者の姿を激しく浮き彫りにし、完膚なきまでにそれを攻撃された。そう言っておられます。けれども、です。けれども、小原先生はどのように厳しく語る一方で、しかしその説教を、自分自身の胸を打ち叩きながら続けられたというのです。そして、そのときと、清水先生は言われます。「（そのとき）小原牧師の（その）説教に、力を与えられたことが忘れられません」。そうおっしゃって、次のように述べておられます。「悩む者にとっては、中途半端な慰めを聞くより、打ちのめされた方が却かえって力を与えられることを経験しました」。分かるような気がしています。自らの至らなさに、悲しみが深く深く深まっていく。そして、そこで初めて、深い深

い慰めもまた与えられてくる。なぜなら、そんな自分であつても、イエス・キリストはなおもそこを立ち去ることなく、そこにいてくださっているからです。そして、そんな自分をも受け止め、受け入れて、なすべき務めへと繰り返し押し出してくださるからです。清水先生もそのようにして、「分かっている。だからこそ、語り続けなさい」と、説教へと再び押し出されていったにちがありません。そこには、密かに名説教家を自負し、いかにも得意げに語る者と決定的な違いがあるように思われます。このように、悲しみの深まるそのところで支えられ、励まされ、力を与えられていく。そして、感謝のうちに、真実強く生きる者とされていく。そうしたことがイエス・キリストの恵みと優しさによって 私たちにはあるということ、今月の聖書は教えてくれているように思います。そのような深い恵みに、ペトロは同じように深くて深刻なところであずからせてもらったのだらうと思います。私たちもまた、同じ恵みにあずからせていただきたいと願います。

ペトロはこうして、大きな（おそらくは、生涯最大の）峠を越えさせてもらったのではないでしょう。か。そして、今度こそ本当に、イエス・キリストの働きへと遣わされていきます。キリストの教会を建て、その群れを牧し、そして福音の宣教を進めていくことです。それを、十八節にあるように、「行きたくないところへ連れて行かれる」ようにしてするといいます。若いときは、着ているものが邪魔にならないようにと、自分で腰に帯を締め、身動きがしやすいようにしてきました。けれども、これからはいつか捕らえられ、両手に縄をかけられ、腰に紐を結ばれて、死の場所へと連れていかれるかもしれない。そのような「死に方」（十九）をして、神の栄光を表わすことになるかもしれない。そう告げたうえで、なおも「このわたしに従ってきなさい」（同）と、イエス・キリストはペトロをその務めに遣わそうとされたのでした。そして、ペトロは今度こそ、その言葉のとおりイエス様に従った。ローマにまで赴いて、そこに教会を建て、そして紀元の六十年代と言われている（六十四年）。あの悪名高いローマ皇帝のネロのもと、迫害の死を遂げたのです。イエス・キリストと同じように十字架につけられ、殉教をしたと伝えられています。

ペトロはこのようにして受け止められ、赦され、そして生き返らされて、遣わされていきました。その意味で、今月の物語はまさに、ペトロの「回復」のそれであり、「再生」のそれであり、「復活」のそれと言えるでしょう。だからこそ、また、この物語は福音書に忘れることなく収められねばならなかった。そうでなければ、ペトロは救われないまま、置き去りにされてしまうからです。

これが今月の出来事であり、今回のメッセージではないかと、私はそのように聴き取らせてもらいました。そして、私は信じています。同じ恵みがこの私たちにも注がれている。ペトロに注がれたイ

エス様のその同じ眼差しが、この私たちにも注がれている。私たちの内にも、同じイエス様の御業がなされていく。そのようにして、イエス・キリストはこの私たち一人ひとりの峠をも越えさせてくださる。繰り返し立ち現われてくるその峠の一つひとつをその都度、何度でも越えさせてくださる。教会の峠もまた、同じようにして越えさせてくださると、そう信じています。そんなイエス様を愛する愛を、ペトロと同じように、日ごとに深くしていけたらと思わされています。

〔祈り〕

愛する神様。

あなたは御子イエス・キリストにあつて御自身の愛を貫かれるお方であることを知って、心から感謝いたします。あなたはそのようにして、幾つもの至らなさにもかかわらず、ペトロを捨て置かれることをなさいませんでした。救いの御業を全うしてくださいました。その同じ御心が今、ここで、この私たちのところにも備えられていることを信じます。ペトロにも増して至らない者ですが、どうかこの私たちをも顧みてくださり、感謝に押し出されて生きられる者としてください。

あなたは、私たちの何もかもを御存じです。欠けたところばかりの者ですが、どうか、あなたを思う私たちの思いと祈りとを受け止めてくださいますように。そして、あなたの尊い務めへと、私たちを生かしてお用いください。

愛する主、御子イエス・キリストの御名によって願い、お祈りいたします。

アーメン